

特集 「新教科書2」— これからの英語教育

# 『CROWN English Communication I・II』 の編集を終えて



慶應義塾大学 霜崎 實

## はじめに

学習指導要領の改訂を受けて、いよいよ今年度から「コミュニケーション英語Ⅰ」が始まり、来年度からは「コミュニケーション英語Ⅱ」が始まる。新学習指導要領では、科目名の変更、語彙の増強、質量面での充実など、重要な改訂項目が明記されている。さらに、基本的には英語で授業を行うことが想定されるなど、高校での英語授業風景も大きく変わることが予想される。ここでは、新学習指導要領の特記すべき点について説明し、今回編集を終えた『CROWN English Communication I・II』の編集方針とその概要について述べてみたい。

## 教科書観の転換

はじめに、新学習指導要領では、「質量面での格段の充実」が求められているという点について触れておきたい。語彙を例にとれば、これまでは中学(900語)と高校(1,300語)を合わせて2,200語であったが、改訂後は中学(1,200語)と高校(1,800語)を合わせて3,000語となり、大幅の増加となる。もちろん、質量面での格段の充実は、語彙だけでなく、レッスン数の増加や総ページ数の増加にも反映されている。

しかし、ここで注意しておきたいのが、同時に教科書観の見直しが要求されているということである。新指導要領によれば、「教科書に記述されている内容は、すべて教えるものである」という教科書観から脱皮して、むしろ「個々の児童生徒の理解に応じた指導の充実に資する教科書」、「児童生徒の学ぶ意欲の向上に資する教科書」、「児童生徒の自学自習に資する教科書」といった教科書観への転換が求められている。こうした転換は、現場での授業のありかたの転換を要求するものであり、端的に言え

ば、「教科書を教える」のではなく、「教科書で教える」ことがこれまで以上に求められることになったとも言える。

これを受けて、今回の『CROWN I, II』では、選択教材を大幅に増やすことによって、「質量面での格段の充実」という要請に応えることとした。例えば、本課に加えて、Optional Readingを載せたのは、こうした教科書観の転換に対応するための工夫の一つである。

## 英語での授業

新学習指導要領では、科目名も「コミュニケーション英語」に変更され、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする」と明記されている。しかし、ここで誤解して欲しくないのは、すべての授業活動を英語で行うことが要請されているわけではない、ということである。例えば、文法事項を英語で指導することまで求められているわけではないし、教師が一方的に英語で講義をすることが求められているわけでもない。指導要領の趣旨は、英語によるディスカッションや発表など、積極的なコミュニケーション活動への取り組みがこれまで以上に推奨される、ということだと思われる。

その一方で、「コミュニケーション英語」は、単なる英会話とは一線を画すものでなければならぬ。したがって、基本教材としての英文については、多岐に渡るテーマについて、生徒の思考力や知的好奇心に訴えるような内容を持っていることが必須条件である。それをもとに、様々なコミュニケーション活動を展開する工夫を組み込むことが教科書に求められていると考える。いかにして英語での授業を円滑に進めるのかについては、現場での創意工夫が

求められるところであるが、今回編集したTeachers' Manualでは、授業プランや、レッスンへの導入方法など、具体的な提案を盛り込んでいるので、ぜひご参考にしていただきたい。

## 題材のテーマと概要

本課で取り上げた題材のテーマは、言語・芸術・科学・環境・遺跡発掘・動物の知性・格差社会・情報化社会・平和・生き方など、多岐にわたっている。まず、『CROWN I』で取り上げたテーマとレッスンの概要を示す。

本課は10レッスンから構成されているが、星印(\*)を付した第6課、第8課、第10課は、現行版か

らの継続レッスンとした。現場からの強い要望に応えるためである。Reading教材2篇は、生徒が楽しめるユーモアに富んだ作品を選択した。また、Optional Lesson(選択教材)としてキング牧師とオバマ大統領の夢を語った“Two Dreamers, One Dream”を導入した。

次に、『CROWN II』で取り上げたテーマとレッスンの概要は以下の通りである。

基本的な構成は、『CROWN I』と同様である。本課のうち「国境なき医師団」を取り扱った第4課のみが継続レッスンとなっている。Reading教材の一つはユーモア短編、もう一つは感動的な実話である。

## 『CROWN English Communication I』

レッスン	タイトル	テーマと概要
Lesson 1	Going into Space	[科学・生き方] 若田光一氏が国際宇宙ステーションでの活動経験や宇宙開発の意味について語る。
Lesson 2	A Forest in the Sea	[環境問題] 東京湾のゴミの埋め立て地を緑化することによって、「海の森」を実現しようとするプロジェクトを紹介する。
Lesson 3	Writers without Borders	[言語・国際性] 言語や文化の境界線を越えて活躍する3人の女流作家の体験から、新しい言語を学ぶことについて考える。
Lesson 4	Playing by Ear	[音楽・若者の生き方] ピアニストとして活躍する辻井伸行氏の体験を通じて、音楽による感動について考える。
Lesson 5	Food Bank	[格差社会・NPO] 貧困に苦しむ人々に食料が行きわたる仕組みを作ったチャールズ・マクジルトン氏の活動を紹介します。
Reading 1	Wisdom of a Fool	[ユーモア] 中世のトルコに実在したとされるムラ・ナスルディンを主人公とするユーモアに富んだ小説を読む。
Lesson 6*	Roots & Shoots	[環境教育・動物] ジェーン・グドール氏がチンパンジーの習性・人間との類似性・環境教育について語る。
Lesson 7	Diving into History	[歴史・遺跡発掘] アレクサンドリアの海底遺跡の発掘に成功した考古学者フランク・ゴディオ氏の考え方を紹介します。
Lesson 8*	Not So Long Ago	[平和・歴史] 20世紀を写真で振り返りつつ、戦争と平和について考える。
Lesson 9	Paddling a Log?	[情報化社会] 情報が氾濫するインターネット社会において、情報をどのように扱ったらよいのかについて考える。
Lesson 10*	Good Ol' Charlie Brown	[生き方・価値観] チャールズ・シュルツ氏の作品を通して、生きるうえで何が大切かを考える。
Reading 2	The Luncheon	[ユーモア] サマーセット・モームのユーモアに富んだ古典的な短編を読む。
Optional Lesson	Two Dreamers, One Dream	[自由・平等・平和] 公民権運動の指導者キング牧師とオバマ大統領の自由・平等・平和についての考え方を紹介します。

## 『CROWN English Communication II』

レッスン	タイトル	テーマと概要
Lesson 1	A Boy and His Windmill	[貧困・創意工夫] 電気・水道のないアフリカのマラウィの少年が、自力で風力発電機を製作した実話を紹介する。
Lesson 2	Into Unknown Territory	[将棋・創造性] 将棋界の第一人者である羽生善治氏の将棋に対する考え方を通じて、「勝つ」ことよりも大切なことについて考える。
Lesson 3	Paul the Prophet	[スポーツ・予知能力] 2010年のサッカー・ワールドカップでの勝敗を的確に予測したポールの話から、予知能力について考える。
Lesson 4*	Crossing the Border	[医療・国際協力] 日本人として初めて国境なき医師団に参加した戸貫朋子氏が、医療援助の経験と若者へのメッセージを語る。
Lesson 5	Txting	[情報化社会・言語] 携帯電話などで使われるユニークな英語表現を紹介するとともに、そこに見られる言語変化の兆しについて考える。
Reading 1	Sun-Powered Car	[ユーモア] 一見するとソーラー・カーのように見える車、しかしその実態は何か? ユーモア短編を英語で楽しむ。
Lesson 6	Ashura	[芸術・伝統] 美しい仏像の代表とされる興福寺の阿修羅像の魅力について、その工法、歴史、表情の謎を通して考える。
Lesson 7	Why Biomimicry?	[科学・自然] 自然の模倣によって、環境に優しいテクノロジーを生み出すことができるというbiomimicryの考え方を紹介します。
Lesson 8	Before Another 20 Minutes Goes By	[地雷・国際協力] 世界各地で多くの被害者を出し続けている地雷を除去するための活動を紹介することで、平和について考える。
Lesson 9	The Long Voyage Home	[宇宙] 小惑星探査機「はやぶさ」の宇宙の旅、小惑星イトカワから物質のサンプルを地球に持ち帰るまでの物語を紹介する。
Lesson 10	Grandfather's Letters	[家族・絵手紙] 祖父から孫たちへ送られた1,200通もの魅力的な絵手紙の発見、手紙を通じて家族の絆について考える。
Reading 2	A Fall Before Rising	[生き方] ヒマラヤで遭難し九死に一生を得たジャイクマー氏は、その経験をきっかけにして、社会貢献活動に乗り出す。
Optional Lesson	MJ	[音楽] King of Popと称されるマイケル・ジャクソン氏と、彼の音楽への取り組み方を紹介します。

## 各レッスンの流れ

ここでは各レッスンの構成について述べておきたい。

まずタイトルページでは、Pre-reading 活動として、生徒の背景知識を活性化させる目的で、Take a Moment to Think を新設した。本課への導入として活用していただきたい。

本文は4セクションから構成され、各セクション見開き2ページとした。傍注で慣用表現を取り上げ、脚注で新語リスト、慣用表現のパラフレーズや例文を挙げるほか、本文の理解を確認するための設問を設けた。さらに、各セクションの終わりには、リスニングによる内容理解の質問も用意した。

本文の末尾には、Food for Thought を新設した。これはOECDによる国際学習到達度調査（PISA）における「読解力」育成を意識したもので、生徒が情報を取り出し、解釈し、自らの体験を踏まえて内容を理解する機会を提供することを目的としている。

Post-reading 活動として、まずComprehensionのCheckで、内容把握問題を4題用意した。続くSummaryは、本文を要約する能力を養うことを目的としたものである。ただし、単に穴埋めすることで活動が終わり、ということではない。あらかじめ生徒に自分で英文の要約を作成させ、その後で要約問題を通じて要約の仕方を学ばせるような工夫も考えられる。

Activitiesでは、本文のテーマに関連した短いダイアログを聴かせた上で、内容把握、作文、口頭のコミュニケーション活動をすることができるよう構成した。

Grammarについては、「英語Ⅰ」と「英語Ⅱ」で基本的な文法項目が完結するように構成した。今回新たにコラムを設けたが、文法を単なる暗記の対象とするのではなく、理解して納得することが重要であるという考え方に基づいたものである。また、学んだ文法項目を活用して、生徒が自分の体験などについて書いてみる練習も導入した。これに続くExercisesでは、Grammarで学んだことを表現活動に結びつけるための練習問題を用意した。

Optional Readingは、本文のテーマに関連した内容を扱った300語から350語程度の英文を取り上げた。本文のテーマを別の角度から扱ったもの、発展的内容を扱ったものなど、本文をより深く理解する助けとなるはずである。ただし、Optional Reading

は発展的な学習内容を含むもので、全ての学校で扱うことは必ずしも想定されていない。自学自習用の教材としての活用もありうる。

Optional Readingに関して特筆すべきは、「英語Ⅰ」の第1課および第6課のエッセイである。“Message from Koichi Wakata”は、若田光一氏ご本人から寄稿していただいたものである。英文は高校1年生にはやや難しいが、日本語訳つきで、原稿をそのまま載せることにした。“Message for High School Students”も、Goodall氏ご本人から特別に寄稿していただいたものである。この場を借りて、両氏にお礼を申し上げる次第である。

## リーディング・スキルと音声の指導

従来、リーディング・スキルについては、「英語Ⅰ」「英語Ⅱ」では取り扱っていなかったが、今回の改訂では『CROWNⅠ』から導入することとした。特に談話標識やパラグラフの構成についての知識は、読解のみならずライティングについても重要である。

音声指導については、Sound Studioというコーナーを設け、[1] 音の連結・脱落・同化、[2] 文の区切り、[3] 強勢とリズム、[4] イントネーションに焦点を絞って、英語の音声の特徴について取り上げた。ただし、これはあくまでも発音のヒントといった位置づけであるから、より実践的な音声指導のためには、音声テープを活用していただきたい。

## おわりに

以上、『CROWNⅠ,Ⅱ』の概要について述べてきたが、シリーズは2015年刊行予定の『CROWNⅢ』をもって完結することになる。こちらは、先行する2冊を受けて、さらに高度なレベルへ到達することを目標に掲げ、いわば『CROWN』シリーズの到達点を示すものになるはずである。生徒の興味関心に訴える内容を持つ点については、先行する2冊と共通しているが、論説文を含むより高度な内容を扱い、大学受験も視野に入れたより実践的な構成になるはずである。高校での3年間という短期間において、中学卒業レベルから大学受験レベルに至るまで、総合的な英語コミュニケーション能力の育成のために、『CROWN English CommunicationⅠ,Ⅱ,Ⅲ』が役立つならば、CROWN編集委員一同にとって、これ以上の喜びはない。